

満拓公社の經理講習所を修了、その間、優秀な成績が認められ訓練所本部の經理部勤務を命ぜられた。

金銭を扱う業務は本間氏に任せれば、何ら憂慮なしの定評を得た彼の前途は洋々たるものがあつた。

しかるに何ぞ凶らん、同二十年八月、ソ連の越境進攻にあい、義勇軍を日本軍と同一視したのか、ソ連軍の襲撃、暴行、掠奪、殺傷、言語に絶する悲惨事にあつた、本間氏は幹部職員として生命をなげうって隊員対策誘導していたが、運よく故郷に引揚げられた。

故里の町長外有志の方々は、本間氏の青年時代から知っておられる、直ちに町役場の書記に採用、副収入役、出納員、議会議務局長、その間、幾度か町議會議員に推されたが、遂にことわりつづけ、現在は町の監査委員に選任されて就任、引揚者団体支部長として親しまれ尊敬されている仁徳の上。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

大陸に生まれ、大陸に育つた「或る男の生涯」

岐阜県 川村 一正

渡満の動機

明治三十七年、鉄道省に勤めておつた父は日露戦争開戦と同時に、野戦鉄道部隊要員として、満州に渡り、朝鮮との国境の町、安東（現丹東）、奉天（現瀋陽）間の鉄道建設に技師として当つたが、戦争終結と共に、明治四十年創立された南満州鉄道株式会社（満鉄）に、就職し、日本におつた家族、母、姉、兄を呼び寄せた。家族が渡満したのは、明治四十年の冬であつたので、朝鮮の新義州と安東の間の凍結した鴨緑江を櫓で渡つたという。私は、大正三年奉天の近郊、陳相屯で生れた。

当時、旅順、大連、奉天、長春間の鉄道沿線両側各二十メートルは、関東軍により編成された独立守備隊二個大隊に依り、警備されており、主要都市は、鉄道

附屬地として、租借され治外法権がしかれており、在満邦人の生活の安全は保証されておった。

父は、鉄道保安の業務であつた関係で、約三年毎に転勤があり、蓋平・撫順・旅順・公主嶺（懷徳）・長春・遼陽と転勤した。

無主地帯満州

撫順は、露天掘りで有名な炭鉱の町、社宅は地区全体集中暖房、冬でも浴衣で暮らせるほどであり、神社の祭礼には、ウツ替え神事があり、参詣の人々と、木製の鴛を替え合つた思い出があつた。

旅順、大連を含む遼東半島関東州は、日清戦争の後、三国干渉に依り、返還されたところであつたが、日露戦争後、改めて九九か年租借し、旅順には、民政を司る関東長官、軍政については関東軍司令官が統轄し、遼陽に師団司令部、その隷下に海城に野砲連隊、公主嶺に騎兵連隊を配しておつた。昭和三年頃のことであるが、海城の野砲連隊で中隊長をしておつた従弟は、毎年、私服の下士官数人を連れて、奉天に来て民宿しながら満鉄地方事務所の地下に格納してある野砲数門

の整備点検をし、非常の場合、砲を据える場所も定めであると語つておつた。

大連には、満鉄本社があり、商業港として中国大陸で有数の港湾設備を誇つておつた。

旅順は、文化と軍港の町として、駆逐艦数隻が常駐しており、落ち着いた町で、西本願寺の法主であつた大谷光瑞師がシルクロードより集めたミイラ等、貴重な品を展示した博物館、文部省設立の旅順工科大学等、又、清朝滅亡後、肅親王一族が亡命しており、後の満州国皇溥儀も暫く滞在しておつた。私はここで小学校に入り、白玉山の中腹にあつた社宅に住み、春はアカシヤの並木の白い花の蜜を吸い、夏は裏山の黄色い月見草の原を踏み分け山頂にあつた三十メートルの忠霊塔の近くにまで遊びに行つた。

公主嶺には、大正十一年に移つたが、ここは平原の真つただ中、春はアヤマが咲き乱れ、騎兵連隊の記念日には在留邦人こそぞつて、遊びに行つた。

当時、満鉄の並行線四洮線（四平街、詭南間）建設用枕木十数万本の山が社宅近くに集積してあり、その

山を飛び移って遊んだ、ある日、夕方小学校の運動場で遊んでおると、二十二、三歳の日本人青年が近づいて来て、「坊達は、馬賊を知っておるか、村を襲う時は、焼酎屋に押し入り主人を引張り出し、弁髪（清朝時代の名残り、髪を長くし、編んで後ろにたらしめておった）を天井の梁に縛り叩くのだ」などと聞かされたが、これが馬賊を知った初めであった。（これは後に知ったことであるが当時この附近に、尚旭東（日本名小日向白朗と云い昭和五十七年一月八十一歳で没した）有力な馬賊がおったことを知ったが、彼の部下であったのかも）

六年生になった時、長春に移ったがある日児王公園（後に関東軍司令部が建ったところ）で馬賊の処刑があると聞いたので行ってみると大勢の群衆が白いマントウを持って集まっており、その囲いの中で十数人の馬賊が、後手に縛られ警備兵に煙草を吸わせてもらいながらガヤガヤと話をしておる。その前には^{まど}株を切る大きな押切りがあり木の枕が置いてある。処刑人は革の前掛けをし押切りの前に立ち一人ずつ引出し、煙

草をくわえたままの馬賊をそこに寝かせ柄を踏む、首がころがる、血が飛ぶ、観衆は一斉にかけ寄り、白いマントウに血をつける。血のついたマントウは万病の薬、その様子を見ておる馬賊は平然として順番を待つておる。全員の処刑が終る迄約一時間、附近には、血腥い空気が漂う、持ってきたマントウに血をまぶした連中は満足気に散って行く。中国では祝いの宴に赤い印のついたマントウを出す^がこれは紅白饅頭の意味もあるが、所謂、薬膳料理の一つであったのかも

またそれより先、大正十四年十二月張作霖の部下であった郭松齡が反乱を起こし、彼の部隊が奉天近郊まで進撃して来た時、張は城内にあった銀貨、財宝を大車（荷車）に山と積み何十台も付属地内の満鉄事務所の二階に保管を頼んだが、その重みで床がきしむ騒ぎがあった。その郭も関東軍の支援に依る張軍の防戦に依り敗北、夫婦で農家に隠れておるところを逮捕、処刑され、その首は奉天城の小西辺門に晒され、屍体は門の下に数日間転がされておった。

昭和二年、奉天中学に入った秋、道一本向こうは、

付屬地外という所に住んでおつたが早朝、付屬地を追われた馬賊が、拳銃を発射しながら道向こうの商埠地に逃げて行くことが屢々あつた。

昭和三年六月四日早朝、北伐軍との戦いに敗れ北京から撤退して来た張作霖の乗つた列車が、奉天近郊に近づいた時、爆破され死亡した(某重大事件)が、それまでの満州は、張一派の勢力圏であり、馬賊、匪賊の横行甚だしく、各部落は近くの馬賊集団に年貢を納め、警備を頼むと共に、それぞれ自警団をつくり夜間しばしば威嚇の発砲をしておつた。

その後、昭和五年張作霖の息子学良は、先の撃ち合ひのあつた場所、商埠地に公式の陸上グラウンドを建設し、そのオープンセレモニーには日本、フランス、中国の陸上選手を集め一大親善競技大会を催した。その時の日本側選手は、跳躍の織田幹雄、暁の弾丸といわれた吉岡隆徳、中距離の津田、女子短距離ランナー人見絹枝等、当時一流の競技人が参加しており、そのスタンド中段の貴賓席におつた学良の得意満面の面影は今だに忘れられぬ印象であつた。

その後、日貨排斥運動が激しくなり奉天の郊外北陵や城内方面から通学して来る仲間が毎日、石を投げられたとか、唾を吐きかけられたとか、交通巡査の棍棒がゾリンゲンの短剣に代わつたとか、空には青天白日旗のマークをつけた飛行機が飛び交うとか風雲ただならぬものとなつて来た。

昭和六年五月、中学四・五年生全員、天津北京へ一週間の修学旅行、途中溝幣子の駅で売つておつた燻製の鶏一羽一元であり、皆とむしつて喰べた味は今だに忘れられぬ思い出、天津、北京の宿で教官よりの注意も中国に子供の頃からおる我々は何のその、三々五々街に。城門には大きく日貨排斥のスローガンが書かれておつたが何の危険も感じず、天津租界、北京の王府井東安市場を歩き廻つて来た。又故宮博物館の莫大な宝物、書画骨董には知識は皆無だが高さ四十センチ、横五十センチほどの紅白のサンゴの盆栽、その他種々の名器の量の豊富さには唯々驚くばかり、その大部分が戦後、台北に運ばれているとか、明・清数百年の栄華が偲ばれた。

六月のある日、登校すると駅前に住む仲間が昨夜、数十頭の馬に曳かせ、長く相当の重量のもの、どうやら大砲らしいものが運ばれていたとの話、守備隊の近くの者も確認、在満十数年未だ経験したことがない緊迫感、何かを待望するようになって来た。

満州事変

その後夏休みも過ぎ毎日進学準備、問題の九月十八日、夜道を散歩しているとその夜に限り洋車（人力車）に乗った日本軍将校が守備隊の方向に何台も行く、しかし、気にも止めず帰り、机に向かい暫くするとドーンという腹にしみる音と共にザーという音、直感的に始まった渾河の鉄橋がやられたと思い、二階から降り家族と話していると、けたたましい電話の音、出ると近くの交番から区長をしておった父に、又医大の外科に勤務している兄にも呼び出し、直ちにそれぞれ服装を整え出掛けた。血気盛んな十七歳、なんでのおんびり家におられよう、家を飛び出し伝令でも手伝おうと派出所に待機しておると本署から「関東軍司令部、司令官以下全員旅順を出発、奉天に向かった」と、明け方

になると童山の朝鮮軍飛行連隊出動、薄明かるくなつた南方より翼に目にしみる日の丸をつけた十数機、このマークを付けた飛行機をどれほど待ったことか、今まで押えつけられた気分が一度に吹き飛び、これよいのだと、朝、軍司令部も浪速通りの東拓に入り臨戦体制に入ったと、遼陽の多門師団も奉天から更に北進、長春吉林に向かつておると連絡。

朝、登校すると皆興奮状態、今朝、司令部に林総領事、森島領事が外務省からの不拡大の訓令を届けに行つたところ、血気立った青年參謀等に抜刀され追い帰されたようだ。昨夜の大砲は、北大營、城内飛行場をねらつたもので弾道下の家の屋根がふわふわしたとか内乱に馴れている城内の住民は皆、扉を閉ざしひっそり、あのえらそうな顔をした交通巡査は一人もおらんかつた、十時頃になって取り敢えず、校長から休校、自宅待機命令、翌日になると戦闘状況がわかってきた。柳条溝の鉄道爆発は、近くにある張学良軍、北大營駐屯兵の仕業であつたと。独立守備隊二個大隊で北大營を攻撃、一夜で占領、城内も戦火の心配なしと一斉に

日の丸を掲げて開店、三、四日すると多門師団、長春吉林に無血入場、更にハルピンに向かつて進撃中とのこと。

一週間程すると、配属将校指揮のもとに、四・五年生全員で北大営に行軍演習、周辺を歩いていると、何かふわふわする。靴先で蹴って見ると兵士の死体、兵営を開む一、五メートルほどの溝には雨水が残っており逃げようとした兵が滑って這い上れず、上から銃剣で刺し殺された者も二・三見受けられた。兵営の中に入つてみると、周章狼狽逃走した跡、足の踏み場もないほど乱雑、婦りに独立守備隊の傍を通つた時配属将校は、営庭に立つておる二本のトタン葺の高い小屋を指し、あれが十八日夜城内・北大営を撃つた三十三インチ砲だと説明し、その時、重砲の射手がいなかったのを野砲の射手に撃たせたので十発ほどしか撃てなかったと裏話をしてもらった。

南満の作戦を終わった部隊は北満の馬占山軍を追つてハルピン・チチハルと進んだが、南満と異なり人口も少なく茫漠とした北満、しかも嚴寒に向かつての作

戦、防寒具、不備の戦闘による被害は、むしろ凍傷に依る傷病者が多く、婦人会の幹部をして馱頭に出していた母が、しばしば食事の時に、今日も手足がなく孤の担架に乗せられた兵隊が三人いたとか、五人いたとかよく語っておつた。その後、毎日戦況に一喜一憂しながら進展に心を奪われ授業は手につかなかつた。

満州国建国以前の状況

満州及び西部蒙古地帯は、清朝時代封禁の地として漢民族の入植を嚴重に禁止して来たが、清朝末期、蒙古の王族、豪族等、ラマ教を信奉する者は教義上、土を掘ることを禁じられており、耕作しようとする時は、ラマ教を信じない者、主に漢民族に頼まざるを得なかつた。そこで春になると山東省から人を雇用することになり、大連から百五十キロの対岸芝罘の人入れ稼業把頭の手配に依り布団と鍋釜だけの苦力（労働者）十数万人を連絡船にこぼれんばかりに乗せて大連に、更に貨車に乗せて奥地へ送り込んだ。彼等は指定の作業場に着くと半円型の安平小屋フクベウを作り、そこで生活しながら日の出から日没迄、種播き農作業に従事し、秋の

収穫が終ると小屋をたたんで南下、大連から故郷へと帰る渡り鳥の如くに。

彼等の安平小屋は五十センチほどの穴を掘り、その上にカマボコ型に安平(高粱殻の皮を材料にした敷物)をかぶせ入口近くに窯を築き十数人が一組となつて生活しておつた。食物は粟の餅子にネギ味噌汁、娯楽道具は八十キロほどの石のバーベル、青竜刀、槍等を、振り廻して楽しんだ。小さな梁山泊、粗衣粗食重労働に耐え、いざとなればいつでも紅槍会匪に変じかねないのが山東苦刀であつた。これが一八九九年五月興清滅洋をスローガンに山東省の一角に外国人排斥を目的として立ち上がった義和団の後裔達であつた。彼等の内の主だつた者把頭を中心とする何人かが満州に残り越冬徐々に居つく者が多くなり満州は山東人の地となり、言葉も山東方言が満州を支配するに至つた。偶々ハルビンから奉天まで南下する二等車中で前に座つた品の良い親娘に言葉をかけたところ暫く驚いた様子でまじまじと見ている、どうかしたのかと尋ねると「満州に来て三十年、初めて北京語を聞きましたが、何時

北京からお出になりましたか」と逆に尋ねられた。それほど満州は山東人の世になつておつたのである。

日本人馬賊大鬼等奉天では毎年三月十日の陸軍記念日に、忠霊塔に軍民合せて約千人が集まつて慰霊祭を行うのが恒例であつたが、その軍民の間の十メートルの通路を弓を持たせた供をつれた羽織袴に太緒の下駄を履いた長鬚、容貌魁偉の大男が悠然と最前列の席に向かう、整列している者の間から「あれは誰だ」「あれが天鬼だ」との囁きもれる。彼こそ、蒙古王族の所有する地券(土地権利書)を張作霖と争い、遂に広大な土地を獲得した福島県生まれの薄益三であつた。

彼以外にも満州には、大陸浪人というより馬賊の大頭目になつておつた日本人には、前記の小日向白朗(尚旭東)、仙台の伊達宗之助(張宗援)、西南の役の時の辺見十郎太の孫(我家の近くに住んでおつた)等十数人おり、大きい集団は二千・三千人の部下をもって活躍しておつた。それほど、奉天、吉林、黒竜江の三省は、群雄割拠の無主地帯であつた。従つて南方広東省から決起した革命家孫文等は満州を日支共同管理地帯

とする案を日本政府に出したり、あるいは広東政府の陳友仁が昭和六年滿州事変勃発前滿州売却案を持って密かに日本を訪れたのである。

終戦前後

二十年になると学生も繰り上げ卒業、教授陣も丙種で年令からも召集のこない筈の連中にも赤紙が来るようになり、大学も日毎に寂しくなつて来たが、七月十五日遂にか、やつとか私にも令状が来た。十六日、残り少なくなつた教授達によつてピヤホールで歓送会、二十六日、吉林と奉天の間の盤石に島木助教と入隊。木隊編成で別れ別れ、この部隊の連隊長は、須貝といひ各地の特務機関長をしてきたソ連通、召集兵は、大部分予・後備の年寄部隊、中隊長は北京から来た予備役中尉、各班長も年寄下士官、要領のいい連中、兵器は五人に一丁程度、殆どはゴン棒剣のみ二・三日は、内務班の編成でゴタゴタ、班長から「川村、お前は大学教授だったさうだから書記をやれ」と、大学教授とはそんな能力のあると思ふ程度の認識、それでも楽な仕事なので指示に従つて適当に。八月に入つてからは

徒手訓練、五日頃より対戦車訓練、直径二十五センチほどのアンパン爆雷を持つて飛び込む訓練、九日早朝訓練をしておると突然頭上に爆音、見上げると赤い星「小隊長、ソ連機！」と叫ぶと、「散開！」近くのも二メートルほどに成長した高粱島の中に全員飛び込む、赤星機は何の攻撃もせず飛び去つたが、演習中止兵舎に戻るとソ連参戦が伝達され、いよいよ覚悟を決めざるを得なくなつた。翌日部隊転進、撫順・奉天間に陣地構築とのこと、陣地といつても小戦車壕掘り、移動の行軍中「どうも負けたらしいゾ」との囁きが流れ始めた。目的地に着き作業命令が出ても作業にかかるともなく皆ぐずぐずしておる。十三日に又転進命令、十四日撫順小学校に宿営、十五日は午後講堂に集會命令、部隊長現われ「陛下より終戦の詔勅発せられ戦いは終わった。よつて部隊解散」を宣せられる。直ちに兵器の集積にかかる。大して銃器は支給されておらなかつたが集めてみると相当量あつた。夜、中隊長から呼び出しがあり「君はロシア語が出来るさうだが明後日、ソ連の接收部隊が来るので通訳として残つてもら

いたい。部隊の若い者百人残ることになっておるので頼む」との要請、ふと不安を感じおもわず「中隊長、残念ですがロシア語は昨日ですっかり忘れまして。」と言うと、中隊長は笑いながら「忘れたものは仕方ない、では他の若い者に頼むよ」と重ねての要請もなく、結局満州国総務庁から来ておった者が残ることになった。更に明早朝には、全員退去するようにとの通達があり、軍服は返納し協和服（国民服）に着換え夜の白むのを待つて学校を離れ奉天の実家に向かった。五・六キロ行くと奉天に行くという大車（荷馬車）が来たのでそれに乗せてもらい、途中城内を通ると多数の民衆が青天白日旗を持ち両側にひしめいていた。何となく不穏な空気、御者にチップをはずみ急いで通り抜け付属地の実家にたどりつく、家に着いてみると年老いた両親と妹、すぐ近くの公園で軍需品や食糧の放出をしておるとのこと、休む間もなく早速行ってみると蟻のように集まり奪い合っている。とにかく、取り敢えず食糧確保が第一と米・味噌・缶詰類をと、妹に番をさせ、三・四回往復すると山はなくなる。丁度道をソ

連の虎戦車が数台轟音を立てて通り過ぎる。その大きさ、頑強さ、想像以上、見慣れた日本の戦車などおもちやのようなもの、日本の陸軍は一体何をしておったのか、相手の軍装備についての情報を入れておったのか、孫子の兵法の第一条も知らなかったのか、全く腹立たしくなった。

家に入ってみると予定しておった家族がハルピンから南下しておらぬ、早速翌日からハルピン行の手配、四・五日駅に通うも、いつ出るか見込みなし。取り敢えず長春までと思い、八月二十四日混み合う夜行で、翌朝長春に着くと向かい側に発車しかけているハルピン行、乗車口まで人がおら下がっている始末、思い切った屋根に上る、五・六人ついて来た。さわやかな北滿の広野を越くこと六・七時間、ハルピンに近づくとハルピン駅頭でソ連兵が日本人狩りをしておるとの噂、ハルピンの二つ手前の王崗の駅に着いた時小便をするようにみせかけ高梁島にもぐり込み人の群がっておる部落の中を脇見せず走るように通り抜け、暫く行くと、国際運輸の荷馬車が空で来たのでついて来た五

・六人と中央寺院まで乗せてもらう。長年運輸で働いておったという車夫、我々に同情的で何かと氣を使ってくれ、無事サポール（中央寺院）へ、他の連中は更にプリスタン（埠頭区）までこの馬車で行くというので独り降り、取り敢えず、学長のところへ、申告と思ひ大直街のマンションへ行く。途中二・三十人の日本人が、三・四人のソ連兵に前後を警戒されて行くのを見たがさほど氣にとめずに行く。一階の入口でハルピン医大の教授から家族全員自決されたと聞くも一応三階の宅に入る。無論無人、学長と陸軍幼年学校時代同期だった竹内教授宅へ電話する。教授は「そんな危険な所におってはいかん、直ぐ出て教職員の避難しておる花園街の家に行くように」とのこと、小路を通って避難先に行くとき五・六人の懐かしい顔、彼等は喜んで迎える前にそんな姿（戦闘帽、協和服、巻脚絆）でよく来れたなと怒鳴られ直ぐ着換えよと支那服を出される。官舎に行くというと、「この明るい中危ない。日が落ちるのを待て」と、そこで始めて院長白井教授一家自決の詳細を聞く、院長は、二・二六事件の時近衛

三連隊の連隊長、退役後満州国治安部次長、特務長官の前歴から戦犯指名まぬがれぬと覚悟し、白井教授は父君が侍従武官であった家柄、二十年に呼び寄せた妻子を殺し、自らも自決したと、校舎、宿舍からの立退きの時には、毎日顔を合わせておった満系学生が接収員を先導して来たので、日本人学生に代わって阻止せんとした蒙古系学生とつかみ合いの喧嘩になりかけたとか、又周囲に群がっておった付近住民が暴徒となつて一斉に押し入つて来たとか、終戦時の混乱振りをかされる。その内、日が暮れたので植物園を通つて官舎へ官舎に近づくと自動小銃をかかえたソ連兵がウロウロしておる。支那服を着ておる私を見て「ストイ（止まれ）」と、ドイツ戦線から廻されて来た彼等には支那人も日本人も区別なし、人通りの途絶えた道を来る者は全てカモ、掠奪の対象とみなされる。金をやると「行け」、官舎の裏に廻ると妻をはじめ女性の集まり「今、ソ連兵が来ておるので男は皆隠れている。直ぐ隠れなさい」と「今そこで会つて来た」と、とにかくすぐ傍の集中暖房の大煙突の内に、疲れておるが中

々寝られぬ。煙突の口のすき間から吹き上げる風は冷たい。外ではコツコツと足音らしい音、それでもまどろむ。夜が明け外から叩く音、出てみると夜通しコツコツと音を立てておつたのは鶏が餌箱をつつく音だったらしい。窓から部屋に入り、暖かい握り飯をもらい、今度は、床下の集中暖房の通路に移動、隣り近所の男達と穴居生活、時々四、五人のソ連兵が掠奪に来て押入れの中から行李、トランクを引き出し、持って行く音、くやしいが何ともならぬ、下手に抵抗すれば簡単にズドン。一週間ほどすると電々公社における仲間から学生を伝令に通訳の腕章を届けてくれる。腕章をつけておればおおっぴらに街を歩ける。毎日午前中に一寸公社に顔を出し、後は仲間二、三人と街へ、夜戻るとモグラの住人に情況報告、各戸窓は侵入防止のために五分板を打ち付けドアには二重、三重に鍵、それでも狙われたら最後、銃床、鉄棒で打ち破つて侵入、百二十戸の官舎群戦時中は隣り組でお互いに連絡を取り合っておつたが、ソ連兵が掠奪に来るようになってからは自己防衛より仕方ない。床下に隠れておる婦女子を

見つけると引き出し、男子供には拳銃をつきつけ別室に押し込め、数人交代で暴行、毎夜どこかの家が狙われ被害、抵抗すれば、行きがけの駄賃、簡単に官舎で殺された者も数人。

この場合、例えロシア語のわかる者がおつてもイキリ立って来る連中には火に油、下手をすると拳銃一発、他人を助けるより先ず我が身を守ること、同僚の鳥木もそれだった。彼は学院でロシア語の助教、ソ連軍の祝日営内で飲んだ兵士が女をあさりにやって来た。トビラを固く閉ざして嵐の吹き過ぎるのを待つておつたが隣りから助けを求め悲鳴に「話しをつけて来てやる」とドアを固く締めしておくようにと言ひ残して出て行つた。翌朝薄明るくなるのを待つて夫人が恐る恐るドアを細目に開けて見ると人が倒れておる。もしやと思ひ近づいて見ると血まみれの夫、大声で付近の人に助けを求め家の中に運び込む、近くにおつた学生が彼の死を誰かに知らせるべく馬家溝の坂を南崗の方に馳けて来る。軍司氏と二人で歩いておつた我々を見つけ「鳥木さんがやられた」との叫びに一緒に飛ん

で行く。ベットの上に寝かされておる体を見ると右胸から左肩に抜ける貫通銃創、死を聞き集まつて来た十数人で通夜、いつ来るかわからぬ暴徒が心配な家族たちは帰り、独身者数人で見とり、翌日付近でかき集めた板材で棺を作り、近くの小公園の片すみで埋葬、その遺骸も引き揚げ後掘り出されどこかへ運ばれたとか(引き揚げ後数年経ったある日、彼の故郷徳島県の地方課員が盤石と一緒に入隊したことをつてに彼の死亡確認に来岐した)我々は毎夜如何にして嵐の過ぎ去るのをヒッソリと待つのに比べ、付近の満州人部落は夜になると空き缶や鍋・釜およそ音のするものすべてを叩き、時にはワァーワァーと叫び声をあげ撃退、更に集団で官舎住民に威圧をかけて来る。負けたことのない我々は唯自らを縮こませることで身を守ろうとする。

地段街を歩いておった時、大勢の人ばかり何事かとのぞいて見ると満人の女が乗っていた自転車を二人のソ連兵が奪おうとしておるそれを見た民衆が騒ぎたてて防いでいる、そのうち、誰が知らせたのか赤い腕章の憲兵二人、群衆に囲まれておる兵を見るなり射殺、

死体はそのまま。彼等の詰所にはいつでも酒がある。貢ぐのは、何かあつた時助けてもらいたい連中の差入れとか。

ある日、官舎の前の道を一杯機嫌の兵がフラフラ歩いておる、危ないと思つて見ていると通りかかった女に襲いかかり道の真中で暴行に及ばんとズボン脱ぎにかかる。そのスキに家に逃げ込み難を免れたが、それを見た満人「犬だ！犬だ！」とはやし立てている。

こんなことは官舎付近だけでなく、日本人のいる市中いたるところで行なわれておった。

ハルピンでの生活

九月末、南下の列車が出るとの噂があつたのでこの際さがらねばと思ひ、掠奪された際こぼれた荷物を片付け処分し友人と駅に行く、暫く待てとのこと、一昼夜待つが出る気配なく念を押すと中止になつたと、仕方なく官舎に戻つたがすることなく思案にくれておると、以前大学の寮に食糧を納めておつた張君が、馬鈴薯、大根、人参等、越冬の利く野菜の入つた麻袋六、七個を大車に積んでもつて来てくれ、売れたら又持つ

て来てやると、早速官舎の広場で開かれておる市に出すと、越冬食糧に飢えておった人々が、五十斤、百斤と、瞬間に売れてしまう。更に追加仕入れする。約一か月で一応行き渡ったところで品数を増して販売し、引き揚げ迄の生活費を稼いだ。

南下できなくなって戻った家に、ソ連国境満州里、海拉爾方面の旗公署におった岡山、迫田の二家族が避難して来た。満州里の南の旗公署におった迫田氏に依ると、旗公署の参事官以下三十数人がソ連軍戦車の猛進から逃れる術なく全員手榴弾で自決したと、又、電話局の交換手数はソ連軍の侵入を各方面に連絡しておる間に避難が遅れ、彼等の乱入、暴行、輪姦を受け、最後に虐殺されたと、又海拉爾から来た岡山氏に依ると、海拉爾近辺の旗公署員は全て海拉爾要塞に入ったが、全員戦死したものと思われると。六疊、四、五疊の家に十三人、寝る時は上を向いて寝られず横になり互い違い。しかも冬に向かつて、集中暖房は使えぬのでその二部屋の間にくず煉瓦を集めて炉を築きそこで煮炊き、便所の使用も大騒ぎ、肝心なことは生活、

そこは人海作戦皆で野菜売り、更には品揃えのために、前日の売上金を持って朝四時に二人で買い出しに行き、二輪車に新鮮な品を山と積んで広場へ、殆ど売れてしまい残りは家族の分、夢中の毎日、一か月半ほどして二家族は空いた官舎に引っ越し、多少楽になった。

仕入れの時の出来事

仕入れ値は、消滅した満州国の通貨が基準、ソ連軍票だと一割増し、八路軍の軍票だと更に一割り増しなせ消滅した満州国の通貨が高いかと聞くと五・六年すれば日本は又帰って来る。その時は、この貨幣は生きる筈だからと、彼等は入手した満州国貨幣を、油紙に包み、壁にぬり込めて隠しておる。引き揚げが決まった日、その前日、いろいろ世話になった張君が来て、明日の仕入れは早く行って高額紙幣を全部使ってしまったようにとの注意、翌朝、指示通り田舎から担いで来た農民から仕入れておると五時頃から高額紙幣流通禁止の噂が一度に流れ始める。翌日いつも行く卸問屋に行くと、金庫の扉を明けギッシリ詰まっておる金を見

せこれが全部使えなくなつたと、五、六年は駄目だろ
うと言つておつた。

十二月二十日、年末になつたから餅つきでもするかと準備していると、ソ連兵二人と通訳がドカドカと入つて来た。「川村はいるか、いつ奉天から帰つたか」「銃はどこに隠してあるか」とたたみ込んで来る。十日ほど前から学院におつた者は引つ張つてゐるらしいとの噂、ロシア語の本は全部押入れの上の神棚の後ろに隠しておいたので、本棚を見ても彼等のわかる本は一冊もない。家探しをしても彼等の期待するものは何もない。引き揚げの時「一緒に来い」と「長くなるのか」と聞くと、「その積もりで」と答える。綿入れの綿服を来て外に出ると、二階の元警察官と一緒に憲兵隊に連行される。鍵のかかる部屋にほうり込まれ、三、四日何の取調べもない。外には三、四人のソ連兵、各所で掠奪して来た腕時計両手に五、六個、袋に十数個入れておるが殆ど止まっている。動かしてくれと持つて来る。竜頭を巻いてやるとコチコチ、耳にあてニッコリ笑つて又袋へ。

留置場には毎日二、三人入つて来るが、直ぐ取り調べ他所へ送る。私については、ほうり込んだまゝいつまでも取調べがないので、同室の中国人に取調べを要求してもらう。夜になつて隊長の尋問、通訳を介しての尋問、尋問の内容がわかつておるので適当に答え二十分、五日振りに釈放、夜道を警戒しながら帰宅、家ではシベリア送りになつたのではないかと心配しておつたところなので皆喜んでくれる。

満州に侵入したソ連兵

二十年五月、ヒットラー自決、ドイツ敗北でそれ迄ドイツ戦線におつた囚人部隊は急遽東に向けられ、世界最強と思われておつた関東軍と対峙するための消耗品部隊、従つて無知文盲、彼等は兵器の取り扱いは教えられておるが数の観念はゼロに等しく、一から九までしか数えられず、それ以上はムノーゴ（たくさん）で片ずけてしまう。このことはシベリア抑留者からも同様の話を聞いた。彼等は銃を撃つこと以外、本能のおもむくまま、輸送機の内に於ても、女兵士を姦するほど、まして町を歩く女性にいどむことは当然という

のが政治将校の弁、ソ連兵がハルピンに侵入した当時、掠奪に入った際、机上に万年筆が置いてあると飛び上がった。理由を聞くと、ドイツ戦線で万年筆に仕込んだ爆弾で多数の損傷を受けたそうである。万年筆はとらず。時計を集めたのだと、冬になると貯炭場にある石炭をトラックで運び出し売り飛ばす。使役にかり出された時、佐官級の将校が飛び廻っておるのに尉官級の将校は焚火にあたり掠奪してきたウォッカを飲み、俺は関係ないという態度、ある日、政治将校に「シベリアにいった連中（捕虜）は、零下何十度の寒さを知らない。何とか保護してもらいたい」と話すと「今年はソ連も飢饉、我々が困っておるのに捕虜の面倒など見られない」とケンモホロ口。

二十一年になると各会社の資材置場からあらゆる物資をソ連に、電々公社の使役に駆り出された時、欠けた磚子、使い古しの電線まで積まされた。後で聞いた話に依ると、鞍山の溶鉱炉五機のうち三機を取りはずして持っていったとか、又ハイラル方面の蒙古からは家畜、牛、馬、羊十八万頭を運び出したとか語ってお

った。

馬家溝風景

馬家溝には、ロシア革命後亡命して来たロマノフ王朝の貴族、將軍等の住まいが多く、木造で、四、五部屋、そのうちの二室を貸し、生活しておった。彼らの大部分は、既に老齡、公園の木もれ日の下のベンチで、貸し本屋から借り出したツルゲーネフ、ドフトエフスキーの作中を静かに読んでおったのが印象的であつた。

しかし、戦後は一変、ここには戦時中、桃山、白菊の二小学校があつたが、桃山は、奥地からの避難民収容所に当てられ、開戦と同時にソ連軍の侵攻にあつた開拓団員、何か月も野山をさまよい衣服もボロボロ、体もドス黒く、頭にはシラミ、麻袋をまきつけやつとたどり着いた人々、敗戦の衝撃を何十日もの喰うや喰わずの逃避行、すっかり痴呆状態、虚脱状態、十月末ともなると火が欲しくなる北滴、食料は日本人会で高粱を支給するが燃料までは。止むなく校舎の板をはがして焚火、しかし、十一月、十二月ともなれば食は我慢できても寒さには耐えられず、校舎の木造部分は次

々にはぎとられ煉瓦だけ。吹き晒しの収容所の中で皆体を寄せ合つて暖を取る。しかしそれも限度、翌朝になると冷たくなつておる。入口に積み上げておくと市から靈柩車で、集めに来る。冷凍箱のようにコチコチになつた死骸を投げ込む、一杯になると手足を折つて麻袋につめ荷馬車で運び出す。郊外のゴミ捨て場へ、野良犬の喰うにまかせる始末、やつと冬を越した者も、極度の栄養失調、ムクんでドス黒い顔で、路傍の芽を出した若草を探してはつまんで口に入れる。その動作はいかにもよたよた、そんな姿を何人も見たが、恐らく帰国はしてしまい。

また、ハルピンでは、冬になると地下二メートル迄凍結して穴が掘れないので冬に入る前に官舎近くの広場に深さ二メートルの墓穴を八個ほど作つた。死体はそこに入れ雪をかぶせるだけ、引き揚げ迄に数体埋葬した。

一方、白菊小学校は、後に八路軍の宿舎になつた。ハルピンに於ける八路軍の募兵は市中から浮浪者を集め、郊外の訓練所に連れていったが、往きは銃を逆さ

まに担いだり、ガヤガヤと本当の鳥合の衆、それが四か月の訓練を経て市中に戻つて来た時は、いかなる訓練をしたのか、整然とした立派な部隊、その変貌ぶりは驚くばかり、その連中の宿舎になつたので毎朝、点呼、朝礼の音が風に乗つて聞えて来る。彼等が来てから付近の様子は一変した。先に述べたように老人の静かな憩いの場所だつた公園も敗戦と共に大きく変化し、大勢の人が群がる喧騒の場に変つた。毎夜、襲撃におびえゆつくり寝ることも出来ぬ日々であつても生きて行くためには、何かをせねばならぬ。ヤミ米を買つて餅を作つて売る者、掠奪を免がれた衣服を金に換える者、また女物の長襦袢を裁つてマフラー、ネックカチーフにして帰還するソ連兵の土産に高く売りつける者、これ等の人で毎日大混乱、更には抱えておる品物をカッパラツて行く小倅、公園は毎日喰うか喰われるかの修羅場、ギリギリの生活の場、そこへ品物を持つて来る女は断髪し胸には晒を固く巻き、顔には白粉ならぬ墨を塗り男装、それでも胸をさぐりに来るソ連兵、豊胸のソ連の女を見馴れておる彼等には不思議らしい。

ノモンハン事件の勇士で大学の配属将校であった日
系満軍大佐は、外に出ることを恐れ、家で毎日餅つき、
家族に売らせて糧を得ておったが、引き揚げの時のハ
ルピン駅で見つかり抑留されたまま未だに消息不明。

引き揚げ

いよいよ待ちに待った引き揚げの日が知らされる。

二十一年八月二十四日、携帯品は、衣服と十日分の食糧に一人当り千円、衣服は掠奪にあり、着た切り雀であつたが、食料は、真夏のこと、何がいいかあれこれ考えたが結局、パンとチーズ、バターくらい。官舎の向かいにおり、肺癌で苦しんでおつたO氏に毎日モルヒネを二、三本買って来て打つてやつておつたが、引き揚げが決まった日、奥さんから到底無事帰国できないから眠らせてやつてくれと頼まれ、知った医師に頼んで投薬してもらい葬式も済ませ、出発の日を待った。

八月二十四日朝、戦後幾多の哀歎があつたとはいへ、六年間、住み慣れた官舎を去る秋、付近の満人何百人もが、集まっている。警官も数人来ている。我々を保護するためではなく、彼等の乱入を防ぐためだろう。

百二十戸の官舎の住民で編成した団、班組織に分かれて、皆、着られるだけの衣服を着け、両肩、背中につけられるだけの背囊、雑囊に食糧をつめて整列、老人、子供のための大車十台ほど待機している。九時頃、班毎に出発、ぞろぞろ歩いてハルピン駅に、ハルピンに来た時はこんな姿で離れることになろうとは考えてもいなかった。

我々が、三、四百メートル行くと、それまで、制せられておつた群衆が一斉に官舎に乱入、今迄にソ連兵に荒らされ何も無い筈、それでも先を争って侵入、はるかに見て胸せまるものがあつたが、今は一刻も早く故郷への思いで一杯。二時間ほどかかって駅に、市内各所から集まった数千人、二百人くらいずつ区切つて金網の構内に、出発前に聞いた話では、検査官は市の職員と聞いておつたが、十七、八歳の男女の学生、腕章をつけた臨時職員、身体検査、持物検査、装飾品は勿論、自分の欲しいものは皆ここではぎ取られる。汗だくで着て来た衣服は全て脱がされ、万年筆、時計もとられる。私の場合、次男が熱を出しておつたので持

つて来た体温計を駄目だと取り上げかけられたが、必死に頼むと別の男がいいヨと大目に見てくれる。

今まで身分を隠してきた配属将校もこの関門通過でさず、家族と泣き別れ、蔭介石が「暴に報くゆるに暴を以つてせず」との布告も北満の八路軍、一般民衆には、そりや聞こえませんと無視され何の効果もない。検査の終つた者から、有蓋貨車に五、六十人ずつ詰め込まれ、二、三両に一人ずつ八路軍兵士が監視につき扉は閉められてしまふ。

翌朝明るくなつた時停車扉が開けられた、外は野原、駅でもないこんな所にと思うと、用便停車、駅に停つたのでは七、八百人の一斉用便はとて無理、飛び出した男女、恥も外聞もない。両側の草むらで。二十分ほどで発車合図、蝗のように貨車に飛び乗る。再び扉は閉められ動き出す。どちらを向いて走っておるか全然わからぬが南に向かつておるらしいことは確かだ。三時間ほど走つて停車、遙かに部落が見える。人々が籠をもっている。用便と食糧購買のための停車、籠の中は、茹で卵、油で揚げた餅、茹でたトウモロコ

シ、大きな菓罐に湯等々、皆、檻から解放され、買物に群がる。汽笛鳴り乗車、八月下旬の満州。貨物の中、人いきれはするが我慢できぬ暑さではない。また、三時間ほど走ると停車、先と異なるのは、停車すると同乗しておる八路軍兵士が両側二十メートルほどの所に並び、売りに来る部落民を一斉に点検。後で聞くと「最初の時、値段がバラバラだったので、引き揚げの民衆に迷惑をかけたので、今度は整理させたのだ。我々は日本とは戦つたが、民衆とは戦うつもりはない。まして引き揚げる人は一銭でも大切にせねばならぬ」と、その後の停車も同様であつた。十二時頃貨車から降ろされる。列車はここまで、後は歩いて行くとのこと、ここは八路軍と国民党軍との緩衝地帯、荷物はそれぞれで担ない子供も歩かせて行くことになつた。一歳半の次男は背に、ぐずる四歳の長男は叱り励まし、始めは、二、三キロということであつたが結局十キロはあつたであろう。やつと列車のおる駅に辿り着いた。駅には国民党軍の兵士が銃を立てて座りこみ、我々の疲れた列を眺めている。暫くすると、引き揚げ団の本部

から女を要求して来ておるが、それを押えるために万年筆、時計、金品を抛出して欲しいとの通達が廻る。

八路軍ではそんな要求は出さなかったのに何事だと不平はあったが、幾ばくかのものが出された。乗せられた列車は前と同様貨車、夜になって発車、気が付くと停車しておる時間が長い。朝になって列車から降ろされ、宿営地に連れていかれた。どうやら吉林らしい。宿営地といっても貯炭場の跡、天幕には持って来た毛布を三角に張り、その中に親子四人、突然暗くなり沛然と大雨、毛布を通してずぶ濡れ、貯炭場の粉炭が浮き出し何とも処置なし。雨が上がって再び貨車に、列車は時々停まる。聞けば機関手のサボタージュ。その度に、団本部から何がしかの包み金を渡して運行させた。

翌日朝、やっと奉天着、五、六時間停車するとのこと、早速走って両親のおった荻町の家、皆帰国したとのこと、ヤレヤレと思いい駅に戻ってみると列車がない。あちこち探し廻り再会。十二時京奉線（北京―奉天間）に乗り奉天を発ち、翌日錦州に、錦州の兵舎跡に団班毎に収容される。錦州には各地からの引き揚

げ団が集まり、引き揚げ船の入港待ちの溜り場、地区に依っては、相当の財産を持って来ておる者もあったが、概して八路軍の管轄下より来た者は着たきり雀。

多数の人が集まっておる者の中に栄養失調に依り、体力消耗して、発疹チフス、赤痢、コレラ等に罹る者が多く、そのため、死亡者が毎日数人、その処理の使役に出される。またそれ等の患者が出た団は、檢疫が済む迄、出発が延期される。場合に依っては一か月も差し止められた団もある。我々はさいわい、一週間ほどの滞在でコロ島に近い錦西へ。ここ迄は近いせいかな蓋貨車、カバーはシート、生憎、土砂降りにあいズブ濡れ、夕方錦西に着く。ここでは庇だけの既、なげなしの衣服を売って食糧調達、更に翌日コロ島へ、又々大雨にたたかれ丘上の社宅で雨宿り、やっと翌日港に。港には、二千トンほどのリバティと並んで三百トンほどの海防艦、乗船前に、DDTでの消毒、頭から体中真っ白、どちらの船に乗せられるかと思っておると海防艦、船中に入って席の割り当て、親子四人で畳二枚程度、それでも雨の心配はない。ハルピンを発って

二十数日いよいよ出帆。三百数十トンの艦、白波を立てて岸を離れる。もう暴徒の心配もない。しかしいつになつたら再び来れるのか、生れ育つた大陸を去る寂しさと共に、敗戦国日本に帰つてどうして暮らしていけば良いのか思ひはちぢに乱れる。食事時になると甲板にある厨房に班毎に軍隊用の食缶を受領に行く。七分粥、配分となると赤ん坊がおるとはいへ、一家四人に一リットル程度、体力を消耗しないようにじつとしておるのが一番、甲板には、うず高く高粱の袋、船員に我々は高粱で命を繋いで来たのだから、それを炊いてもらいたいと頼むと元水兵は「皆さんは長い間ご苦労されて来たのだからせめて白米のあるうちは白米を食べてもらいます」と、四日目に對馬を左に見ながら五日目に博多港に、やれやれ着いた。上陸かと思ふと檢疫のため、沖に停泊、夜福岡の町の灯、船内に戦災を受けた都市をしるした地図が張り出された。焼野原、行き先益々不安になる。九州の者には知人から差し入れがあつたらしいが、他地区の者はひもじい思いの日々に変りなし。五日目にやっと上陸。リュックは

空、雜囊は空、長男の手をひき帰国第一歩、援護局の手続き、引き揚げ証明書と一人当り千円の援護金、昼食にこぶし大の五目握り飯、早速かぶりつく、粥でしぼんだ腹は忽ち、拒絶反応、便所に飛び込む間もなく素通り、更に米軍の尋問、満州の実情を聞かれるが栄養失調の身には全て忘却、十分ほどあれこれ尋ねられたがとても思い出せぬ。追求もなまま解放、更に妊婦で希望者は出張保健所で墮胎も受付けておつた。駅迄、乞食の行列、輸送列車は又々貨車、しかもセメントの粉の残る車、走り出すと風に巻かれて目や鼻に、これが帰国第一歩の歓迎かと思ふと先が思いやられる。小倉で客車に乗り換える。これが又復員兵やヤミ屋で殺人的な混みよう窓からの出入、女の胸をさぐりに来る痴漢、隙あらばと狙う者、道徳の退廃その極、大変な世の中になつたものだと感じざるを得なかつた。

三日目の夜、暗い焼け残つた田舎駅岐阜に着く。九月三十日ハルピンを出て三十八日目、駅前にあつた二階建の建物は取り壊されたのかさむざむとし、町の方を見ると、焼野原の向こうに、うっすらと木立（金神

社)その先に高い建物(現近鉄百貨店、元丸物)が見える。さていずこへ。

家内が実家に電話してみると早速父が自転車を持って迎えに来てくれる。リュック、雑囊空っけつ、着ているものはハルピンで見た難民そっくり、自転車に積む何物もない。並んで歩く三人言葉もなく、ただとほとほと、先に見た木立のそばの家へ、バラックとはいえ五室、両親兄弟十人ほど集まり、無事を喜んでくれる。電燈の下、やっと帰った実感。

奉天の両親は、北方の近くに疎開しておる東京の姉達のところにおるとのこと、二日目に行く、農家の離れを借りておる、十日ほど前に着いたとのこと、父は失意と疲労のために床に、両親を支えて帰ってくれているとはかり思っていた妹は奉天で腹膜炎になり、その死を待って帰って来たとのこと、さぞ大変であったと思つたが、奉天からの帰国は割合持ち物の制限ゆるく、また近くの若者が同行してくれたとか、その父も二か月の病床生活のまま十一月中旬他界、引き揚げ船の中で考えておつた小作に貸してある二・五町歩の田

畑は、戦後、引き揚げられなかった事情は考慮されず、小作料だけで充分暮らしておつた町の地主と同一視、不在地主の名のもとに強制買上げされ、一段千円で小作に払い下げられていた。食糧確保のため、一部でも買戻したいといえれば段当り四千円と吹き掛けられ小作料もとらず三十数年貸してあつた屋敷跡一段歩を頼み奉つてやっと返してもらい、六畳と四・五畳の家を、市会議員をしていた従弟の斡旋で市から払い下げを受けたが、屋根材は杉皮葺、雨が降ると雨漏りのするありさま。そこに母と甥姪三人を住ませ、我々は岐阜駅前広場に作つたハルピン街と称された三寸丸太と製材ハズレの材を使つてのバラック、マーケット一枘一・五間に二間の一コマ親子四人、これも屋根は、普通は屋根下に使う木端葺、天気がいいと割れ、夕立があるとそこから雨が降り込む、冬の雪解けには、ポトポト、家というには余りにお粗末、常に傘の必要な住まい、十四世帯、京都、大阪方面の食糧買出し部隊への一膳メシ屋、靴屋、茶碗屋、お前はロシヤ人との付き合いがあつたのだからロシヤ料理をやれと、ロシヤ

スーポルシチ作りに田舎まで出かけ骨付馬肉、半日煮込み、神戸からの買い出しの人にはほめられ神戸に
来る様にと誘われちよつといけると自惚れたが、地元
の連中にはサッパリ、作つた半分は自家消費、古木屋、
引き揚げ者用に配給された衣服を売って元手に衣料品
店、その後二、三年の間に申込者百四十人、皆それぞれ
自分の服をバラし、型をとり既製服作り、田舎のミ
シン持ちに頼んで加工、全国の繊維市場へ担いで売り
込み、波状的に拡がり、岐阜の田舎町は東京、大阪の
市場に次ぐ三番目の繊維の町に一躍発展、今日の声価
を得た。これも裸の引き揚げ者集団の喰わんがための
我武者羅戦法であつた。

また、当時の荒廢した世相は、人間生存のための三
大要素、衣食住の住の欠落にあり、微力ではあるが何
らかの活動をしようと住宅組合を作り、三千円と労力
提供、家のない者の団結により、三千戸住宅建設の運
動を起した。一戸七・五坪十戸の二階建を計画し、組
合員を募つたところ多数の賛同を得、岐阜で三百戸、
名古屋で百五十戸、東京で二百戸の実績をあげたが、

占領軍の介入に依り、その後の計画は中止のやむなき
に至つた。しかし、その後、政府が積極的に住宅建設
に乗り出したので我々の初期の目的は達せられたもの
と誇りをもつておる。

大陸に生まれ大陸に育つた我々の八十年の生涯は波
乱万丈であつたが、ただ働くことにより敗れた祖国再
興に微力を呈したことを自負し筆を擱く。

執筆者の横顔

川村一正氏は大正三年に生まれ、小学校は旅順と長
春で学び、奉天中学卒業、更にハルビン学院卒業して
直ちに満州国政府入り蒙政部蒙古新聞班長を経て母校
ハルビン学院で蒙古民族学を担当し、教鞭をとつた満
蒙生え抜きの引揚者では希有の学術、行政、政治に長
けた方である。

大陸、満州の事情は幼年時から感激響くような学生
時代、既に肌の一つ一つつきさすように認識を深めて
いた。

広漠たる大陸に山岳の中で生きる名物馬賊のことま
で博識であるのみならず、満、蒙、鮮の民族万古

の史実を脳裏に描きながら終戦まで、否、現在も東亜の平和と発展は日本民族の重要性を説き、高齡をむかえた今日も努力していることはむべなるかなである。

終戦後の満蒙大陸は中国兵、八路军、ソ連軍が入れかわり立ちかわり攻撃し、日本人に対する罵詈雑言の暴行、殺戮、徹底的に悪逆無人道の限りをつくしたが、川村氏は危機一髪を幾度かがれて、南下できたことは奇跡とか、運がよかったと言いますが、川村氏その都度における情勢判断と素早く断行する創意工夫にあった。

それと、ハルピン学院で教授した教え子が全滿の要所に多くの支持協力者がいたことである。このことは良き教授であったことだ。

更に川村氏の父親が、南滿州鉄道の幹部技師として、蓋平、撫順、公主嶺、遼陽、長春と、滿州の重要都市を中心として建設事業に四十余年の長い間に、滿州現地人との深い交友をもった積善のお蔭が、その息子、川村一正氏に眼にみえぬ恩恵に浴し得た。

引き揚げて岐阜市にハルピン街と名付けたところ

に、バラックマーケット一枿ひとまを求めて親子四人で人生第二の出発をされた。

もち前の他人を立て、己れは後に控え目で働き、大きく繊維業を仕上げ、更に住宅組合を設立し、国民の要請に応じて、岐阜に、名古屋に、東京に約七百戸住宅を建設した。

その間、引揚者団体岐阜県連合会長、社団法人引揚者団体全国連合会理事に就任し、引揚者福祉向上に努力している誠意に市や県の理解と協力を浴している幸せ者である。

(社引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

引き揚げ体験記

愛知県 渡辺 貞二

終戦前

私の物心のついた時代は滿州事変から支那事変へ